社會的態度の一貫性について

— キツネモチ迷信現象に対する態度測定の問題（その二）—

野　　村　　昭

（昭和33年11月11日受理）

§　1.　問　　題

先にわれわれは，5点尺度法を用いてキツネモチ迷信現象に対する態度尺度の作成を試みたが，その際，① 選び出された意見項目の数が少なかつたこと（8項目），及び，②「絶対さんせい」,「やゝさんせい」における「絶対」と「やゝ」は，Likert法の上下分析，及び Guilford の公式による weight の算出では，殆んど相対的に弁別力を欠いていること等が示された(1)。だから，この尺度は，態度の強さを示すに至らず，その方向のみを測定するにとどまつた。これは，調査対象として大学生を使用したために否定態度の方向に偏つたことにもよるが，仝時に，彼等の恣意的な態度の表明にも基くと考えられる。

また，迷信調査協議会の全国調査の結果によれば，憑依現象を信ずる率の全国平均が17.58%なのに対して，山陰地方は4.63%という非常な低率を示している(2)。しかもなお，山陰地方にはキツネモチ迷信現象が残存継続・波及・浸透して問題を投げかけているという事実は，一つの矛盾的事態だと考えられる。

以上の二点から考えて，その一因として，調査対象の反応は，かなりの恣意性・流動性をもち表面的意見の表明が多いのではないかと思われるのである。

そこでわれわれは，文意の順逆の一対になつた意見項目を用いて，その順逆の意見項目に対する反応の一貫性（consistency）の観点から，態度の体制化の度合を見て行こうと考えた。この場合，一貫性とは，原項目に対して「さんせい」したものは，その逆意項目に対して「はんたい」するというような，順逆二項目に対する無矛盾性を意味するものである。

われわれの日常経験をかえり見ても，例えば，提出された原案に対して「さんせい」することは容易であつて，必ずしも明確な態度をもつていなくても可能だが，「はんたい」するには，それ以上にその原案に対する態度の体制化（殊に意見による態度の表明の場合には，そのイデオロギーの水準での体制化）が要求せられる。そこに「さんせい」反応と「はんたい」反応とが，それぞれに内包する意味の相違が仮定せられ，何れの反応へより傾くかが態度の体制化への一つの手懸りになると考えられるのである。すなわち，「さんせい」反応への傾きと「はんたい」反応への傾きとを比較する時，前者は，単なる受動的・恣意的・流動的な態度からでも生起してくる場合があるが，後者は，より高度に体制化された態度から導かれてくるのではなかろうか，という仮説に立脚してキツネモチ迷信現象への態度の解明を試みようとするものである。

そこで，反応の一貫性の観点から見て，操作的には，各意見項目ごとに，一貫的であることを示す人々（順逆無矛盾反応）が多いのは当然のこととしても，反応のしやすさという点で「さんせい」はしても，「はんたい」しにくい人々が，「はんたい」はしても，「さんせい」しにくい人々よりも多いのではないかと考えられるのである。

（歴史的展望） 一般に，種々の調査質問に当つて，その反応に「さんせいへかたむく傾向」が存在することが認められたのは，それほど目新しいことではない。Thorndike, E. L. は，既に「〝はい〟と答える傾向」（Tendency to answer yes）という語でこのことを指摘しているし（9, p.194, 脚註），本研究が示唆をうけた Rundquist, E. A. & Sletto, R.F. は態度尺度の構成にかかわる技術的問題に着眼し，一般に「社会的に受入れられる」（socially acceptable）と考えられる事象についてそのいゝまわし（phrasology）が，順逆一対になつた意見項目を作り，論理的にはその順項目にさんせいする人は，逆項目にはんたいしなければならぬにも拘らず，「さんせい」はしても，「はんたい」することに労を惜しむ事実の多いのを見出している。彼等は，この現象について，さんせいは，時として，反応者の決断的な感情（pronounced feeling）を意味してはいないが，はんたいは，反応者がその事象について以前から或考えをもち，実際に積極的な態度から形づくられて来た結果生じたと考えているのである(10)。

この逆意文を用うる方法は，「社会問題についての所信」（Beliefs on Social Issues）を測定した Smith, E. R., Tyler, R. W. et al によつても採用されている(11)。彼等の尺度は，全200の意見項目から成立つており，その問題は，(a)民主主義，(b)経済的関係，(c)労働及び失業，(d)民族，(e)国家主義，(f)軍国主義の6領域に分類せられているが，それぞれは，また2つの部分に分けられている。この2つの部分が互いに相反する観点に立つ意見項目なのである。反応者は，これらの意見項目に対して，「さんせい」，「はんたい」，「なんともいえない」（uncertainty）の3反応を示すことを求められている。Smith, et al は，この反応によつて，a）観点の方向（リベラルか保守か）b）観点の不確かさ（uncertainty），及び，c）観点の一貫性*(consistency）の各スコアを求めている。この際，彼等は，必ずしも，「さんせい」反応と「はんたい」反応を分析して取あげてはいないが，一貫性を一つの反応分析の基準とし，それが観点の方向についての見解の明晰さ（clarity of outlook）を示すものと考えているのである。

Newcomb, T. M. は，Thorndike に示唆されて，数年にわたり，Bennington College の学生に関して，P. E. P. -scale（Political and Economic Progressivism）等を用いてその社会的態度の変容を研究した時に，その反応に2つの傾向があることに気づいた。すなわち，a）さんせいへの傾向（tendency to agree）と b）用心深さへの傾向（tendency to be cautious）**

---

* Smithらの "Consistency" は，2つの水準で理解される。一つは，6つの領域で，その観点が一貫性をもつているか否かということであり，他は，同一問題に対する一対の順逆項目についての反応の一貫性を意味している。われわれの場合は，この後者にあたる。

** Newcomb の記述には矛盾している個所があるので，この第2の傾向については充分に述べることは出来ないが，恐らく「極端な反応（"1"or"5"）よりも中庸の反応"3"になる傾向」を意味していると思われる。

とである。彼によれば，この2つの傾向は，時に変化が認められるとしても，相当の期間（数年）にわたつて維持されているものであることが測定された。しかし，Newcomb の場合は，P. E. P. その他の態度尺度が妥当性をもつか否かに関して，副次的にこの2傾向を取扱つているために，この2傾向によつて態度スコアがそれほど影響を与えられるものでないことをも説いている。すなわち，或個人の態度スコアが数年の間に変化したと考えられる場合，その変化にこの2つの傾向の保持が，ほんの僅かしか影響を与えていない旨を考察しているのである(9)。

最近になつて，パーソナリティ測定の一手段として，California の F-scale の逆 -scale に関する研究が幾つか行われるようになつてきた。反応者が，もしイデオロギー的に一貫性をもつているならば，F-scale とその逆 -scale との間の相関係数は+1.00を示さねばならぬにも拘らず，実際にはそうでないことが示されている。（例えば，Bass, B. M. は +0.20, (4); Chapman, L. J. & Campbell, D. T. は2つの標本について+0.17 と−0.01, (5); Jackson, D.N. Messick, S.J. & Solley, C.M. は −0.35, (6); Leavitt, H.J., Hax, H. & Roche, J.H. は5つの標本について見れば −0.66と +0.42の間に相関があつた(7)。これらの結果は，F-scale の逆転が適当であるかどうかの問題を提起するが，同時に，反応者の反応の構え（response set）が問題になる。事実，前記の4研究者は，高い相関の見出せなかつたのは，この反応の構えによるものであることを指摘している。Gage, N.L, Leavitt, G.S. & Stone, G.C. は，F-scale を含む4種のテスト類を用いて，反応の際の黙従傾向（acquiescence tendency）を見た。（このテスト類の中には，殊に，この黙従傾向を見るための「真偽テスト」（Information-True test）が含まれている）。彼等は，この黙従傾向は，権威主義者への傾向の或面を反映していると仮定し，Positive items*に対する「さんせい」反応は，論理的には非権威主義的なことを示すが，心理的には，「さんせい」反応である故に黙従傾向を含んでいるので権威主義的であることを示す場合もあり，「はんたい」反応はその逆である。だから，Poitive items は権威主義を測定するに妥当性が少いが，これに対して Negative items は，論理的・心理的共に，「さんせい」反応は権威主義的，「はんたい」反応は非権威主義的であることを意味しているのでより妥当性が大きいことを示唆している。彼等はこの黙従傾向に関して，「心理学的にははんたいすることは，さんせいすることよりも，〃自我の強さ〃，〃情緒安定性〃，及び〃自信〃が大きい」と考え，また項目との関係では「難かしくて，あいまいな項目が黙従傾向を要求している」と述べ，黙従傾向と項目内容の関係，及びその心理学的意味に言及している(8)。

また，Christie, R., Havel, J. & Seidenberg, B. は，F-scale の逆 -scale を慎重に作成して黙従傾向の検証を行い，結論的には，たしかに或項目には，少数のものにその傾向が認められる

---

* Gage らの用いている "Positive", "Negative" items の語は「F-scaleは，全部 negative statements から成立つている。すなわち，この statements にさんせいする場合に権威的態度を反映している」の意で用いられている。だから非権威主義的な内容を示す項目を Positive, 権威主義的項目を Negative と称していることになる。訳しようがなかつたので，そのまゝにしておいた。

が，大部分の項目分析では，F-scale の逆意項目でも，F-scale での高得点者と低得点者とを積極的に区別することが出来るのであつて，だから権威主義的傾向と黙従傾向とを同一視することは支持出来ないことを述べている。すなわち，彼等は，諸研究の F-scale とその逆-scaleとの相関の低さは，むしろ，逆意項目が，心理学的に必ずしも原意の反対を示していないことと，教育程度が黙従傾向に影響を及ぼしていることとに基いているのではないかを暗示しているのである(3)。

このように，多くの研究者が，程度や考えの差異こそあれ，態度測定の際の反応の型に着眼し，「さんせい」と「はんたい」の意味の相違を示唆，或は分析しているのである。

（仮説） われわれの見出した2つの事実と，以上の諸研究の簡単な展望とから，われわれは，少くとも次のような仮説を導き出すことができるであろう。反応の際の構えの一つとしての「さんせい」への傾向，或は，「さんせい」への黙従傾向を認めるならば，

仮説Ⅰ：一般に，「さんせいへかたむく傾向」が生起するチャンスは「はんたいへかたむく傾向」が生起するチャンスよりも大である。

仮説Ⅱ：われわれの対象は大学生であるために，その社会ではキツネモチに否定態度をとることが，より社会的に受入れられる態度であると見なすことができる。だから，キツネモチの否定をあらわす内容の項目に対して，よりさんせいにかたむく傾向，或は黙従傾向が存在する。（Rundquist & Slettoの暗示）

仮説Ⅲ：態度の極端なものの方が（肯定・否定態度の何れかへ大きくかたよるものの方が），中間の態度をとるものに比べて，態度のより高度の体制化を示すと考えられる。すなわち，一貫性の欠如，黙従傾向は中間態度者に多いであろう。（Newcomb 及び Christie et al * の暗示）

§ 2. 方　　法

（被　験　者）　島根大学学生（男10名；女4名）
　　島根農大女短大学生（女46名）　計95名
　　松江城西学園学生（女35名）

（平均年令：19才4ヶ月（18才～22才））

（こゝで用いた対象は，大半が女子であるために，性差の検討は以下の分析ではなされていない。）

（意見項目の作成）先の研究で採択した8項目について，それぞれ逆意の内容をもつ意見項目を作り上げた。逆意の意見項目の作成にあたつては，Christie et al. が検討すべき3つの点を指摘している。すなわち，(a)論理的な逆意を示す場合（logical opposition to the original items），

---

* 彼等は必ずしも，この仮説と同様なことを述べているわけではない。しかし，Newcombは，反応傾向の一つとしての“用心深さへの傾向”を指摘しているし，（そこに中間態度者により response set が多いことが考えられる。）Christie らの結果は7点尺度法で「response setは，極端な「さんせい」反応をした人々（得点7）よりも中間的な「さんせい」反応をした人々（得点5）の間にひろまつている」と述べている。

(b) 心理学的逆意を示す場合（Psychological opposition to original items），(c) 極端な表現をさけた場合（Avoidance of extremity of wording）である(3)。彼らは F-scale の逆意を試みた場合にこの3点について検討を加えたのであるが，われわれの場合にあつては，(c) の表現の極端性（例えば，〝どんな～もない〟，〝決して～しない〟，〝全面的に～である〟等）は先研究の手続き上において，既に弁別力を失する可能性を蔵していたために，採択した意見項目の中には殆んど見当らなかつた。また，論理的な逆意の意見項目と，心理学的な逆意の意見項目*とは，一般に，言語，及び文章の意味の両面を示すものと考えられ，必ずしも明確には分離され得ないのが普通であろう。Christie et al も指摘しているように，心理学的逆意は，原 F-scale での高点取得者も低点取得者も，共にその逆意の意見項目を受入れる可能性があり（つまり非弁別的である），しかも主観的な項目の意味づけに陥る危険がある（判断の主観性を免れ得ない）し，それ以上に，われわれがもしも Christie のいう心理学的逆意を試みようとする場合には，予備テストの段階での意味の多義性の検討が必要であり，それにしてもなおかつ，個々の反応者にとつて，その意見項目の意味解釈（interpretation）は異なるかも知れないことが予想される。だから，本研究でのわれわれの逆意項目の作成の基準は，主として，原項目に対する「論理的」な逆意であることに主眼がおかれた。しかも，文体論的に云うならば，このようにして選択された文章は，最も単純な形態でその逆意を示すことになる。それ故に，部分的には若干の言葉づかい(wording）のギコチなさが認められる（Tab. 1）。

かくして得られた順・逆の16の意見項目が無作為に配列された。これらの項目は，その内容に

Tab. 1 態度尺度

番号	肯定意見項目	否定意見項目
1.	キツネがつくということは本当にあることだ。	キツネがつくなどということは存在しない，
2.	キツネにとりつかれた人は，へんなそぶりをする。	キツネにとりつかれた人がへんなそぶりをするというのはでたらめである。
3.	キツネがつくということは，ないとは思うが，ひと(他人)がいうから信ずる。	ひと(他人)は，キツネがつくことがあるといつているが，自分は信じられない。
4.	キツネモチには，科学的な根拠が認められる。	キツネモチには，科学的な根拠はない。
5.	キツネモチには，ふれないでおいた方がよい。	キツネモチの課題については，大いに論じた方がよい。
6.	キツネモチは，四民平等の原則には反していない。	キツネモチは，四民平等の原則に反している。
7.	キツネモチは根強い迷信とは云えない。	キツネモチは，根強い迷信である。
8.	キツネモチが，日本社会のガンの一つだとはいえない。	キツネモチは，日本社会のガンの一つである。

* Chistie らは「Psychological opposition」という語に明確な定義を与えてはいないが，その示す例題より見れば，論理的な順逆意は，その述べるところが論理的に両立しない場合，心理的順逆意は，必ずしも然らざる場合，原意の欠ける場合をも想定している様に見える。つまり，彼等は，今迄の研究の心理学的逆意文の不適当さを強調しているように思える。

よつて，「憑依現象」にかゝわる項目（1. 2. 3.4）と，「社会現象」にかゝわる項目（5. 6. 7.8）とに分けられた。

なお，Tab. 1に示された肯定・否定の意見項目について附言しておきたい。「肯定」，「否定」は，われわれの研究にあたつて少くとも3つの用法をもつと考えられる。すなわち，(a)キツネモチ迷信現象に対する肯定と否定（是認と否認），(b)文章形態上の肯定文と否定文，(c)反応の際における肯定と否定（さんせいとはんたい）とである。われわれの用うる肯定・否定の語は，(a)の意であつて，(c)の場合は「さんせい」「はんたい」の語を用い，(b)は問題にはならない。

（被験者の反応） 先研究(1)で明らかなように，5点尺度法による反応のスコアリングをやめて，被験者は，「さんせい」，「はんたい」，「どちらともいえぬ」の3反応の何れか一つにチエックすることを求められた。そしてその反応は，スコアの総和によるよりも，順・逆一対の意見項目に対する反応の組合せによる「反応の型」(reaction-pattern）として分析された。

被験者は，最初のテスト施行後2週間で，再び同一のテストが同一方法で施行された（95名中の内数60名）。

§ 3. 結　　果

（**反応の型**） 順・逆に対する3反応の組合せで，以下の10の反応の型が想定される（Tab. 2）。

I） キツネモチ迷信現象に対する肯定態度

1） 肯定項目に対して「さんせい」で，否定項目に対して「はんたい」：(consistency)

2） 肯定項目に対して「さんせい」で，否定項目に対して「どちらともいえぬ」：(tendency to agree)

3） 肯定項目に対して「どちらともいえぬ」で，否定項目に対して「はんたい」：(tendency to disagree)

II） 中間態度

4） 肯定項目に対して「どちらともいえぬ」で，否定項目に対しても「どちらともいえぬ」：（これも一種のconsistency＊である。）

III） 否定態度

5） 肯定項目に対して「はんたい」で，否定項目に対して「さんせい」：consistency)

6） 肯定項目に対して「はんたい」で，否定項目に対して「どちらともいえぬ」：(tendency to disagree)

7） 肯定項目に対して「どちらともいえぬ」で，否定項目に対して「さんせい」：(tendency to agree)

IV） でたらめ態度

8） 肯定項目に対して「さんせい」で，否定項目に対しても「さんせい」；(tendency to

＊ Smithらは，この反応の型は“Consistency”とは称していない（彼のConsistency scoreには算定されない）が，他の研究者の順逆の相関による Consistency の算定では，当然含まれてくる。

agree)

9) 肯定項目に対して「はんたい」で，否定項目に対しても「はんたい」；(tendency to disagree)

V) 不明態度

10) 無記入，及「わからぬ」，「知らぬ」，「答えられぬ」等その他の反応

以上を分析の基本型とした。

Tab. 2. 各々一対になつた意見項目に対する反応の型(f) (N＝95)

意見項目	肯定態度			どちらともいえぬ	否定態度			でたらめ反応		不明
	肯−賛>否−反	＝	肯−賛<否−反		肯−反>否−賛	＝	肯−反<否−賛	肯−肯	否−否	無記入
P 1.	3	4	1	14	8	55	9	1	0	0
2.	3	5	0	45	6	24	10	1	0	1
3.	4	0	1	8	9	57	10	4	1	1
4.	1	0	3	14	3	63	6	1	2	2
S 5.	8	5	5	15	10	33	11	3	2	3
6.	3	11	0	26	0	49	2	2	0	2
7.	4	3	0	20	0	48	11	6	3	0
8.	3	14	1	26	2	38	3	4	1	3
計	29	42	11	168	38	367	62	22	9	12
安定度係数	.397	.405	.357	.705	.302	.845	.132	.109		.505

(註) 1. P: 憑依現象を示す項目　S: 社会現象を示す項目

2. >，<の不等記号は，それぞれの反応の傾きを示す。　例えば〝肯−賛>否−反〟は「肯定項目には賛成するが，否定項目には反対しない」ことを示す。

3. ＝は，反応の一貫性を示す。

4. 安定度係数は，95名の内数60名の反応に依て求められたものである。

(態度の方向) 全汎的に云つて，キツネモチ現象に対する否定態度に傾いたのは，先研究と同様，対象が大学生なるためと考えられる。だから，学生社会で，受入れられる態度は否定態度であることが認められる (Tab. 2)。

(「さんせい」への傾向と「はんたい」への傾向との比較) 仮説Ⅰで述べたように，「さんせい」への傾向の出現のチャンスは，「はんたい」への傾向の出現のチャンスよりも多い(Tab. 2，3)。Tab. 3は，Tab, 2 の中の反応の型の中で，「さんせい」への傾向，及「はんたい」への傾向を

Tab. 3 賛成反応への傾向と反対反応への傾向の比較 (f)

意見項目	1	2	3	4	5	6	7	8	計
賛成傾向	13	14	18	8	22	7	21	10	113
反対傾向	9	6	11	8	17	0	3	4	58

それぞれ合計して，特に取出して見たものである。この両傾向の出現のチャンスはP<0.10で有意差が認められる。(仮説Ⅰ)

しかし全汎的に見れば以上の様であるが，意見項目内容との関係から個々に見て行けば，

(a) 憑依現象項目に肯定態度を示す反応では，その反応の型の出現の仕方に一定の傾向が認められる (P<0.01)。

(b) 社会現象項目に肯定態度を示す反応では，その反応の型に一定の傾向があるとは云い難い，(0.25<P<0.30)。

(c) 憑依現象項目に否定態度を示す反応には，その反応の型に一定の傾向があるとは云い難い。(0.10<P<0.20)。

(d) 社会現象項目に否定態度を示す反応には，その反応の型の出現の仕方に一定の傾向が認められる。(P<0.01)。

(e) でたらめ反応の「さんせい」への傾向と「はんたい」への傾向との出現の頻度は，その頻度が少いために，両者間には差異を認め難い (P>0.50)。

である。だから，(a) 憑依現象項目に対して肯定態度を示す反応の場合と，(b) 社会現象項目に対して否定態度を示す反応の場合とに「さんせい」への傾向をより認めることが出来る。すなわち，表面的態度はこゝに多いということが考えられるのではなかろうか。

また，第4項目のみは「さんせい」への傾向と，「はんたい」への傾向とに差異がなく，項目の検討が望まれる。

次に，再テスト法によつて反応の型の安定性 (stability) を見る。この方法は，元来，テストの信頼性の算定に用いられる方法であるが，こゝでは，求められた係数が，各被験者の反応の型がいかに固着されているかを示すものとして安定度係数という名称を用いた (Tab. 2)。こゝでは，より体制化された態度から生起した反応の型が，より安定性が高いということが云えよう。これによれば，

(a) 一貫性反応の型が，最も安定性が高い。(殊に否定態度の場合。)

(b) 否定態度を示す反応の型の中では，「さんせい」への傾向型の方が「はんたい」への傾向型の方よりも安定性が低い。

(c) 肯定態度を示す反応の型の中では，「さんせい」への傾向型と，「はんたい」への傾向型との間には，安定性の差異が殆んど認められない。

(d) でたらめ態度は，矢張り，最も安定性が低く，流動的である。

(e) 不明態度は，比較的安定度が高い結果が示される。

以上，恣意的・流動的な態度は，否定項目の「さんせい」へかたむく反応と，でたらめ反応とに見出される。(仮説Ⅱ)

(個人の態度スコアと一貫性との関係)

今までは，反応者の各意見項目ごとの個々の反応を中心として，その型の分析をしてきたが，個々人の態度スコアに基いて，その一貫性や「さんせい」への傾向を見て行けば，Tab. 4. 5. の

ようになる。この場合，各個人の態度スコアは，Newcombの例にならつて(9),* 便宜的に，〃肯定態度を示す反応の数〃から，〃否定態度を示す反応の数〃を引いて算定したものである。だからそのスコアは，＋8から－8までの間に分布することになり，正の数の多い者ほど肯定態度が大と見なされ，負の数の多い者ほど否定態度が大と見なされる。われわれの対象は否定態度にかたよつたため，＋8から＋5までは全然存しなかつたが，得られた結果をほぼ3分し，(a) 態度スコアの高い者（H群）（＋4～－2），(b) 中間の者（M群）（－3～－5），(c) 低い者（L群）（－6～－8）に分けて考察した。

Tab. 4　**態度スコアと一貫性との関係**（人数の%）

態度スコア	一貫性の数 2	3	4	5	6	7	8	N	一貫性の数の Mean	S D
H	8 0	12.0	16.0	16.0	36.0	4.0	8.0	25	5.04	1.54
M	5.3	2.6	2.6	23.7	23.7	15.8	26.3	38	6.11	1.59
L	0.0	0.0	0.0	9.4	21.9	59.3	9.4	32	6.69	0.92

（註）H：態度値の高い者（+4～−2）　M：態度値の中間の者（−3～−5）
L：態度値の低い者（−6～−8）

Tab. 4によれば，態度スコアと，一貫性を示す反応（「どちらともいえぬ」の一貫性を含む）の出現との間には一定の関係が存在する（P<0,01）。すなわち，否定態度のより大きいと見なされる個人が，より一貫性の数が大きいことが見られ，また，その分散は，H群とM群との間には差異は存しないが（P>0.05），L群は他の二者に比してより小さい(P<0.01)。

態度スコアと「さんせい」への傾向（でたらめ反応の「さんせい」傾向を含む）との関係を見れば，この場合も，否定態度のより大なる個人が，「さんせい」へかたむく傾向が少いということが云える（P<0.05）（Tab. 5）。その分散は一貫性の場合と同じく，L群は他の二群に比してより小さいのが見られる(P<0.01)。

こゝに，否定態度の大なる個人が，一貫性にまさり，「さんせい」への傾向の少いことが見ら

Tab. 5　**態度スコアと「さんせい」反応への傾向との関係**（人数の%）

態度スコア	さんせいに傾く数 0	1	2	3	4	5	6	N	さんせいに傾く数の Mean	S D
H	20.0	40.0	12.0	4.0	24.0	0.0	0.0	25	1.72	1.46
M	36.9	26.3	23.7	2.6	7.9	0.0	2.6	38	1.29	1.41
L	31.3	53.1	15 6	0.0	0.0	0.0	0.0	32	0.84	0.67

* Newcombは，「さんせいへの傾向」を見るのに，「さんせいの数」－「はんたいの数」，「用心深さへの傾向」を見るのに，「moderate の数—extremeの数」(i.e. 5点尺度法だから，3点の数－(5点＋1点の数))という簡単な公式を用いている。

れ，そのような反応の型の個人間の変動も小さい。しかし，H群は，必ずしも肯定態度の大なる個人群を指しているのではなく，むしろこの場合は，肯定と否定との中間に位する態度をとるものと解すべきであろうから，仮説Ⅲは或程度満されたと考えることができよう。しかし，こゝでは，極端な肯定態度をとるものが存在しないので，否定態度の方向のみにこの仮説が適用され得るのみである。もしも極端な肯定態度をとるものが，一貫性に欠け，「さんせい」への傾向が大なれば，この仮説は修正されるし，否定・肯定態度の体制化の相違が改めて問題になる必要がある。

§ 4. 考　　察

（逆意の意見項目の使用について） Christie らも指摘しているように，この種の研究では，逆意項目の検討が充分になされることが一つの重要なポイントとなる。この点に関してわれわれの研究の意見項目をかえりみるならば，

(a) 原意見項目は，尺度構成上の手続きを経て選択されているために，多義性に関してはほゞ妥当と思われる*が，逆意の意見項目ではこのような操作を経ていないので論理的な反対の意味の文章を作成，ために表現がギコチなくなつた。このことは，被験者が文章を読み，反応するのに時間を費したと内省した点に示されている。表現上の検討が望まれる。

(b) 上述の表現の問題にも関係しているが，各意見項目では，黙従傾向にかなりの差異が見出される。換言すれば，黙従傾向を見るのに適した項目と不適な項目とが存在することが考えられる。殊に第4項目は黙従傾向を見るには不適な項目の様に考えられる。この項目は論理的には逆意たることに問題はないだろうから，意見内容に他の項目と異つた反応の構えを生ぜしめるものが存するのかも知れない。

(c) 同一の機会に，順・逆の意見項目を同時に与えることは，一対になつた意見項目に気づかせ論理的な反応を行わせるような構えを形づくるおそれがある。（だから，Rundquist, Christie, Smith らは，順・逆を別々に異つた機会に与えている。）われわれの場合は項目数が少いために同時法を採用したのであつて，上記の別々の方法の方がまさると思われるのであるが，それにしてもなおかつ，「さんせい」への黙従傾向が認められたのである。

（結果の要約　及び考察） キツネモチ迷信現象の態度調査や，従来の「反応の構え」についての諸研究から導かれた3つの仮説は，ともに，われわれの分析の操作を通じて，概ね満されたと考えられる。

（仮説Ⅰに関して）――従来の研究では，「さんせい」への傾向を見るのに，Consistency score や，原項目反応と逆意項目反応のスコアの相関を求めることに終始してきた観がある。これも一方法ではあるが，単なる相関の算出のみでは必ずしも「さんせい」への傾向を示すことはできない。相関係数は相対的な変動を示すのみだからである。だから，われわれは，反応の型の出現頻

---

* それでも，なお，検討すべき点は残つている。（文献（1）参照）

度を比較した。その結果は，必ずしもチャンスとして「さんせいへの傾向」が大であるとはいえないが（P<0.10），その傾向性は認められる。しかし，その中でも殊に内容の点でいえば，キツネモチ現象の憑依現象の面を肯定する場合のさんせいへの傾向と，社会現象の面でキツネモチを否定する場合にさんせいへの傾向の出現のチャンスが大きいことが見られる。より単なる受動的な同調傾向や表面的意見は殊にこゝに多いと云うべきだろうか。

（仮説Ⅱに関して）―― 反応の型の安定性を従来の信頼度によつて見ようとした。これは，より高度に体制化している態度より生起していると考えられる反応の型ほど安定性をもつということが仮定出来るからである。これによれば，その安定性は，否定態度では，高い方から ①一貫性反応，② はんたいへの傾向，③ さんせいへの傾向．の順位であるに対し，肯定態度では，この3反応型の各安定性の間に殆んど差異が存しない。このことの一因として，被験者の学生社会で受入れられる態度が「キツネモチに対する否定態度」であることを考えることができる。肯定態度の3反応型の安定度に殆んど差異が見出せないその理由の一つは（殊に「さんせい」への傾向が他と区別され得ないのは），その態度が社会的に受入れないということと，「さんせい」への傾向との葛藤にあると考えることができる。こゝでわれわれの場合には，同じく黙従傾向とはいつても2つの場合が仮定される。すなわち，「社会的に受入れられる」と思われる事象

Tab. 6, **黙従傾向に仮定される反応と項目の型との関係**

項目の型	反応			反応	
	≈さ　ん　せ　い≈			≈は　ん　た　い≈	
肯定項目	A	社会的に受入れられるという意味 ：非黙従傾向　(ir) 心理学的反応の構えという意味 ：黙従傾向	B	社会的に受入れられる　：黙従（r） 心理学的反応の構え　：非黙従	
否定項目	C	社会的に受入れられる　：黙従（r） 心理学的反応の構え　：黙従	D	社会的に受入れられる　：非黙従（ir） 心理学的反応の構え　：非黙従	

（註）r：rational
ir：irrational

に対する反応の際の黙従傾向（同調傾向）と，一般に質問調査に当つて心理学的に反応に「さんせい」へ傾く傾向があるという黙従傾向（仮説Ⅰの場合）とである。この関係を示すわれわれの図式をGageらの形式にならつて（8.p.100）作るとすれば，Tab. 6のようになろう。例えば，キツネモチを肯定する項目に「さんせい」する傾向（A欄）は，社会的に受入れられるという意味ではむしろ，黙従傾向（同調する傾向）をもたないが，心理学的な反応の構えとしては「さんせい」反応なるが故に黙従的であると考えられる。

このように二面の黙従傾向の関連性から見れば，その反応傾向には複雑なものが含まれていることが見られる。Tab. 6のAとD（肯定態度），CとB（否定態度）との組合せによつて，われわれの反応の型が生れているのであるから，黙従傾向が態度の体制化のより低いことを反映していると考えると，仮説Ⅰからのみいうならば，DよりもAの，BよりもCの出現のチャンスがま

さり，（態度の流動性を示し）そして，それは，C，B；A，Dの順に流動的であると考えられるのだが，しかし上述の安定性（体制化の度合）の検証では，BとCとの関係は是認され得ても，DとAとの関係はそうではない。だから，こゝで Tab. 6 の仮定から推量できることは，黙従・非黙従両傾向の葛藤を含むA（肯定一さんせい）が，D（否定一はんたい）と安定性の点で殆んど差異が認められない，否，むしろ Dより安定度係数は高いのだから（+0.397），Aでの「社会的受容」への非黙従傾向が，心理学的な「さんせい」への傾向よりも強いのではないかを思わせる。しかし，われわれの場合，「社会的受容」への非黙従傾向は，同時に非合理性の承認を示すことになる。だから，その非合理性へとあえてふみ切つた反応は或程度体制化された態度より生じたものとは云えるが，換言すれば，逆に合理性の承認・社会的受容への黙従へと同調して行つた反応が相当あつたことをその安定度係数によつて仮定せられるだろう。（殊にDでは，非黙従傾向が態度のより高い体制化を示すとすれば，その指標と考えられる安定度係数が各欄よりも最も高くなければならぬのに必ずしもそうとはいえない。これは「社会的受容」への非黙従が直ちに非合理性の承認と示すという葛藤事態を考えねばならないと思う）。だから肯定態度の「さんせい」への傾向は，否定態度のそれよりも，その体制化は高度であるが，それでも，そこには「社会的受容」（合理性の承認）への黙従傾向が作用していることを認めざるを得ないであろう。

更にわれわれの被験者が大学生であつたことは，Christieが異つた8つの標本について黙従傾向を見た際「教育程度が高いほど一貫的，否，むしろ「はんたい」への傾向をもつ。このことはイデオロギー的に混乱が少いことを示すのではないか」(3)と，教育程度と黙従傾向との関係を指摘するように，他の標本との関係を考慮して見る必要がある。それは，これらの反応の型の分類が妥当であるか否かの検証のためにも必要なことである。すなわち，この反応の安定度係数は，これらの反応が一つの態度の体制化の指標たることの妥当性を示すと考えられるのだが，その他の指標（例えば，教育程度．性別，出身地・生育地等）との関係は，こゝではまだ検討されていないのである。

（仮説Ⅲに関して）――われわれの結果は，仮説Ⅲの一部分を証したにとどまる。われわれは一般的な見地からこの仮説を提唱したのであるが，一つの社会的事件に対する態度のように，その肯・否の態度の人々が共に多数存し，かつ議論の余地が残されている場合には，この仮説はイデオロギー的見解の明瞭さから見て妥当と考えられようが，キツネモチ迷信現象のように，それに対する肯定態度のイデオロギー的見解が必ずしも明瞭であるという可能性に乏しい現象に対する態度では（なぜならば，キツネモチを肯定する態度は，仮説Ⅱにても暗示されるように，仝時に非合理性を容認する態度を意味するからである），この仮説Ⅲが肯定態度の方向にも直ちに適合するかどうか疑問でもある。むしろ極端な肯定態度は，より多く非合理性を含むと考えられるので，でたらめ反応等の反応特徴がより見られるのではないかとも思われる。ともあれ，仮説Ⅲの検討も今後に残された問題である。

以上の結果を綜合すれば，少くともわれわれの資料では，殊にキツネモチ迷信現象を否定する場合の反応の中に，「さんせい」への傾向が見られ，そう云つた人々は，特に態度方向から見れ

ば，極端な否定態度の人々よりも中間的な位置づけをもつ人々に多いことが見出された。おもうに，この種の人々の態度は「社会的受容」へかたむく傾向(これは合理性の是認——キツネモチの否定)に影響されておつて，体制化されておらず，流動的・恣意的である(安定性の欠如)と考えられる。彼等は社会的に受容される考えや，合理性をもつたイデオロギーが何であるかをよく知つている。だから，キツネモチに対して否定を示す表面的意見を首肯し，表明する。これらの表面的意見をもつて態度測定を行う場合には，彼等の社会的に受容れられると思われる合理性への同調性（conformity to the rationality）をも含めて測定したことになる。山陰地方での憑依現象を認める率の低率は，これが一因をなしていると思われるのである。

こゝに少くとも，キツネモチに対して，中間態度をとるものの態度構造の二重性（黙従傾向と非合理性の温存）の問題が暗示されるのだが，われわれの資料では極端な肯定態度の人々を含んでいないので積極的にはこれらのことを認めることができず今後の検討に俟ちたい。

（この研究の一部は，第15回中四国心理学会で発表したものである）

文　　献

1. 野村　昭：ある迷信現象に対する態度について —— キツネモチ迷信現象に対する態度測定の問題（その一）—— 島大論集，No. 8. 1958.
2. 今野円助：霊魂信仰による生活慣習の分布，迷信調査協議会編 ≪生活慣習と迷信（第4章）≫（日本の俗信3），1955，抜報堂
3. Christie, R., Havel, J. & Seidenberg, B. : Is the F-scale irreversible? J. abnorm, soc. Psychol, 56, 1958, pp.143～159.

以下の4論文は，Christie et al から引用されたものである。

4. Bass, B. M. : Authoritarianism or acquiescence? J. abnorm soc. Psychol. 51, 1955, pp.616～23.
5. Chapman,L. J. & Campbell, D. T. : Response set in the F-scale. J. abnorm soc Psychol. 54, 1957, pp.129～132.
6. Jackson, D. N., Messick, S. J. & Solley, C. M. : How 'rigid' is the 'authoritarian'? J. abnorm. soc. Psychol, 54, 1957, pp.137～40.
7. Leavitt, H. J., Hax, H. & Roche, J. H. : Authoritarianism and agreement with things authoritative. J. Psychol. 40, 1955,pp. 215～21
8. Gage, N. L., Leavitt, G. S. & Stone, G. C. : The psychological meaning of acquiescence set for authoritarianism. J. abnorm. soc. psychol. 55, 1957, pp.98～103.
9. Newcomb, T. M. :Personality and Social Change : Attitude formation in a student community. New York : Dryden Press, 1943 (rev, 1957), Pp.225 (especially, pp.193～195.)
10. Rundquist, E. A. & Sletto, R. F. : Personality in the Depression : A Study in the Measurement of Attitudes. 1936. (cited from Goodenough, F. L. "Developmental psychology. "1945)
11. Smith E. R., Tyler, R. W. and the Evaluation Staff : Appraising and Recording Student progress. (Adventure in American Education, vol. III) New York : Harper & Bro. 1942, Pp 520. (especially, pp.203～29.)